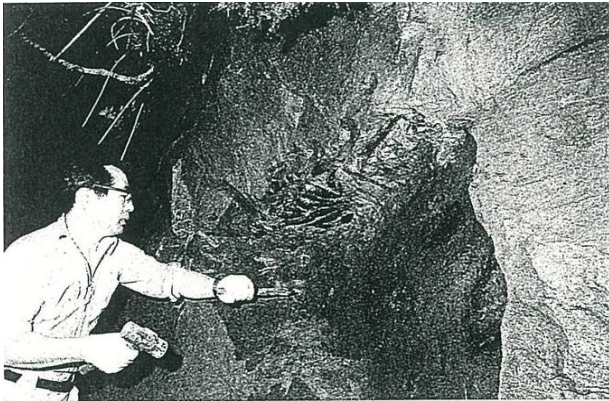


# ⑫ ナカマチクジラ

那珂市歴史民俗資料館



平成22年(2010)8月、多賀山地に属する常陸太田市長谷町山間部、茂宮川上流から脊椎動物の祖先や三葉虫などの生物が生きたカンブリア紀の地層が発見されたとの報道がありました。およそ5億1100万年前のもので日本最古の地層であり、日本列島形成の長い動きが分かる重要な意味を持つとのこと。 「日本列島形成の始まりがこの茨城の地域だったと言える」ともいわれています。

昭和59年(1984)5月初旬、JR水郡線額田駅の西北、額田南郷を流れる久慈川の支流谷津川右岸の崖で、那珂市福田の高橋勇さんと親類の子どもたちがハクジラ(マッコウクジラ類)の化石を発見しました。この地層は淡青灰色の砂質泥岩層で多賀層群瓜連層に属し、中期中新世末から後期中新世初頭にあたる約1100万年前の地層であり、哺乳類動物が出現した頃とされています。

化石部を母岩から削り取った岩塊は130cm×50cm×30cm大の矩形岩塊です。この化石の調査研究に当たられた方々は、長谷川善和・木村敏之・国府田良樹の三氏です。化石の状況からすると、死後地層中に埋積する前に腐敗・分解し、分離した骨の多くに腐敗が起きるまで堆積面上に露出していたことが考えられます。また、胴部などはほとんど流されて別の場所に移動したか、現在の箇所にあったがその後の浸食によって<sup>さくはく</sup>削剥され、流れ去ったものと考えられます。確認された化石は歯30点余、指骨2点、頭骨<sup>ふんぶ</sup>吻部、下顎骨一部、周耳骨などです。歯の形態は概して湾曲して末端に向かって徐々に細くなり、歯根表面には縦方向の浅い溝状の構造が発達しています。歯根の断面はおおむね円形または楕円形をしています。歯の噛み合わせによる摩耗の程度は少ないこともあり、このクジラは比較的若いものとされています。

この類のハクジラ化石はまだ未発見のため、便宜上当時の町名から「ナカマチクジラ」と命名されました。現物は茨城県自然博物館に展示されています。当館の展示物は複製です。額田地区を含めてさらに奥深く海岸線が迫っていた当時に思いを馳せてみるのも楽しいことです。(上記三氏による研究成果の論文「茨城県の中新統多賀層群瓜連層より産出したマッコウクジラ類化石」によります。)

